

当時の平民社同人は大ていマルクスの崇拜者であつた。幸徳の如きも、私の論文「小学教師に告ぐ」〔本著作集〕を以て無政府主義なりと批評した程であつた。其所へ蕨村の個人的無政府主義が論戦に来るのであるから、其激戦の様は大てい今からでも想像がつくであらう。ニイチエの思想は之よりも以前に登張竹風等によつて紹介されたが、蕨村ほど徹底的ではなかつた。岩野泡鳴が半獣主義を唱へる様になつたのは尚ほ後日の事である。蕨村の著『無政府主義』は当時の作物であつて、日本思想史の文献として、一地位を占むべきである。私は日本を脱走してから、再び帰来して後にも、遂に蕨村を見舞ふの機会を得ず、却て先年其訃音に接して驚いた。近時其全集の出版を聞いて私どもかに喜んでゐる。

共働事業の思ひ出

私は明治三十七年に『消費組合の話』〔本著作集〕といふ小冊子を書いたことがある。それは最初の平民社が創立せられた翌年のことで、平民文庫の一冊として出版された。それは諸同志がそれぞれ自分の得意の題目を選んで分担を定めたものであつたが、私には何も得意な題目がなかつたので、この地味な題目が割り当てられたのであつたと思ふ。ふるい事ではあり、その後、ヨーロッパ欧羅巴に長い放浪生活をしてゐた結果、一切の文献が紛失してしまつたので、たしかなことは云へぬが、主としてホリヨークの著書を参考にして、ロッチデールのパイオニアの事業などを書いたのだと思ふ。

この小冊子が因縁になつて、東京市内に少くとも二つの消費組合が創立され——もつと多かつたと思ふが、はつきり思ひ出せない——私はその両方に関係した。一つは二三年前に物故せられた平民病院院長加治時次郎氏が中心になつて組織され、最初は米の配給だけを行つた。私はこの組合の幹事の人であつたが実務には殆んど関係しなかつたやうに思ふ。もう一つはたしか雜貨商を持つてゐた一青年だつたと思ふが、その個人の仕事を抛つて消費組合の創立に傾倒した。その青年は京橋に居た人で

あつたが、本郷千駄木辺の小民街に居を移し、そこで仕事に着手した。その青年はたしか堀といふ姓であつたと思ふが間違つてゐるかも知れない。

ところが『平民新聞』に対する政府の弾圧は厳しくなる、遂に平民社は解散を余儀なくされる、引き続き闘争が激烈になり、同志といふ同志は入りかはり立ちかはり監獄に投じられ、次で創立された日刊『平民新聞』の署名者であつた私は、四つか五つの被告事件を一人で引き受けて入獄した。こうした闘争状態が数年間続いた結果、消費組合のことなどは何時の間にか忘れて了ふやうになつた。

○

その頃——第一平民社の頃——共働的生産事業を計画するものもあつた。吾々も少しづつ資本を拠出したが、その金で北海道に僅かばかりの土地を手に入れることが出来た。四五人の青年は輝やかしい夢を懐いて寒い北海道まで行き非常な苦難をも排して開墾に着手した。最も開墾や農業に経験のある老人が一人これに加はつてゐた。

けれども美しい夢に憬れた青年達にとつて、その自然との闘に於ける筋肉労働と精神上の寂寞とは、とても堪えがたい苦悩であつた。遂に青年達はその土地全部を老農夫一人に与へて、東京に逃げて帰つた。ロバート・オウエンのニュー・ハーモニーやフウリエ学徒の共同村さへ失敗したことを思へば血気にはやつてゐた吾々のやうな無経験な青年の計画が夢の如く消えてしまつたのも已を得ない。

○

英国のロバート・オウエンの学徒達によつて企てられた消費組合や、シャルル・フウリエの感化によつて、仏国に發達せる共働生産組合を、吾々は既に三十年も昔に摸倣し企図したのであつた。殊に消費組合に就いては諸方に演説会を開いて、その宣伝に努力した。併し、それ等はいづれも前述の如き事情で消えて了つた。消えては了つたが、何の結果をも残さずに消え去つた訳ではない。少くとも吾々によき経験を与へた。殊に主農的共働村落の計画は今日尚ほ吾々の心をそよる夢であり、及ばずながら機会ある毎に私は宣伝を怠らない。また地方なぞに行くと時々小冊子『消費組合の話』のことを話されて昔を思ひ出すことがある。あの貧しい小冊子が些かにも跡を残してゐることを発見して嬉しくもあるが、また若しや間違つたことでも書いてはゐないかと恐れもする。

○

今日ヨーロッパに於ける吾々の同志達は共働組合——消費組合及び生産組合——を以て、来るべき自由共同社会の模型たらしめ、基礎たらしめねばならぬ、として非常な熱心で研究してゐる。今日の労働組合を新社会の自治生産組合たらしめるには、その用意を以て今から組織の方針を立てなければならぬ。消費組合も矢張同様である。ロットデールは好き模範を吾々に垂れたのであるが、吾々は更に吾々の社会的イデオロギイに基いて、その進展を計らなければならぬ。

消費組合も生産組合も、自由と連帯とが第一要素とならなければ、完全な発展を遂げることはできない。そして、その自由と連帯とは吾々の理想社会の第一原則である。こゝに吾々の理想社会と共働事業との密接な関係がある。即ちこの第一原理によつて消費と生産と教育とを組織して行くことに於て吾々の社会改造の建設的事業は尽きると云つてよい。

巢鴨刑務所の思い出

戦争犯罪人に対する判決が言い渡された。侵略戦争の謀議に与つたり、戦争法規に背反したり、したという理由によるものらしい。

しかし、罪はどうあろうとも、いずれの被告も相当の老年者なので深い同情が寄せられる。いかにもむごたらしく感じられるからだ。

わたしも、あの巢鴨監獄——今は拘留所と呼ばれるところだが、昔は監獄と名づけられた——には一年あまりいたが、あまり愉快なところではない。幸徳秋水も、堺枯川も、みなあそこの鉄門をくぐった先輩だが、われわれが投獄せられたのは、戦争反対論のゆえであった。しかるに今度の老人達がいずれも、戦争の指導者、助成者であるのが、いかにも奇しき因縁であるように感じられる。うつり行く世の有様を展望すると、まことに有為転変の情に打たれざるを得ない。

あの巢鴨の鉄門をくぐったとき、わたし達は、まだ若かった。